

# 清末小説から 135

2019.10.1

いくたびかの阿英目録25……………樽本照雄 1

包天笑「空中戦争未来記」など(上)……………荒井由美 5

漢訳小説「ヴェニス商人」(上)——「一磅肉」と「一斤肉」……………沢本郁馬14

『老残遊記』初版の刊年——孟晋書社に關係して……………神田一三24

《广肇周报》(1919~1920)小説目録……………王 玉27

林译小説口译者李世中生平考……………王 玉29

清末小説から31

★次号予告です。奥国維也納愛孫孟著『環瀛誌險』の原作を見つけました。愛孫孟とは意外罫

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

## いくたびかの阿英目録25

樽本照雄

### 阿英目録は特別な存在

阿英目録についての高い評価は決定されている。内容をあらためて検証しなおすことはない。私の知る限り阿英目録の補遺というかたちで文章が公表されたことが2度あるだけだ。

研究者が各自で点検をしている可能性はあるかもしれない。清末小説の版本について最近刊

行されるものを見る。それには個別の作品について阿英目録に触れることも見受ける。

たとえば前出習斌の『晚清稀見小説経眼録』(2012)だ。習斌の書籍は書影を収録して信頼性の高さを誇示している。書名のとおり実物を所蔵し自分の目で確認しているところに特色がある。

ただし翻訳は対象にしない。なにか考えがあるのだろう。それはおいておく。

習斌が文中で引く書目は「據諸家書目所記」で一括りになっている。このなかには中国で刊行された樽目録第3版は含まれていない。その結果、樽目録第3版に掲載されている作品でも「向来未見諸家小説目著録」(292頁の表現)ということになる。

そういうからには具体的に例をあげなければ失礼になるだろう。ひとつで充分だ。

習斌は201頁で「滑稽小説家庭百怪録」(上海沈鶴記書局)に言及する。表紙写真を示してわかりやすい。諸目録に見えない(此刊本未見

諸家書目著録)ことを強調する。だが該書は樽目録第3版に「j0193」と記号をふって収録してある。その数は多くはない。だが皆無ではないといっておく。

諸家書目でひとまとめかと思えばそうではない。例外的に孫楷第『中国通俗小説書目』、『中国通俗小説総目提要』、『中国古代小説総目』などの書名があげてある。そのなかにあつて特別扱いをしているのは阿英目録だ。「阿英先生《晩清小説目》」と引く。阿英目録に収録されているかどうか。これがひとつの判断基準となっているのだ。習斌の著作が「晩清」で阿英目録と共通しているところからも理解できる。

同じく習斌の『晩清稀見小説鑑蔵録』(2013)においてもそれはわからない\*79。こちらのほうが、前著よりも阿英目録への言及頻度が多いように感じる。

現在にいたるまで愛されている阿英目録だ。私は皮肉をいっているわけではない。習斌にとっては阿英目録にかわる目録が存在しない。永遠の基準でありつづける。そう理解できる。

それにしても阿英目録に誤りがあるとの指摘が出てくることはあるのだろうか。少なくとも本稿のようにまとめて(といっても網羅しているわけではない。各作品の詳細については樽目録第11版を参照されたい)公表されたことはなかったように思う。長い時間が経過している。あるいは発表されたが私が知らないだけかもしれない。そうであればご教示をいただければさいわいだ。それよりも阿英目録の存在そのものが無視されるかもしれない。

私は年刊研究誌『清末小説(研究)』(2012年第35号で終刊)を編集刊行した。季刊『清末小説から』は現在もウェブで公開している(2019年6月8日現在、第134号)。

中国からも投稿があるのでその論文を読む。そのなかに阿英目録を引用して間違っている。それをメールで指摘すると、また阿英の間違いなのかと返事があった。「また」とは何のこと

だ。どうやら限られた中国人研究者のあいだでは阿英の誤記についてはある程度の認識はあるようだ。ただし上で述べたように集めて公表されたことがない。そのため同じ箇所でも同じ間違いを再生産するらしい。

そういう例をあげよう。

### 改良小説社か小説改良社か

出版社にふたつの表記が存在する。実は改良小説社であるにもかかわらず、それを小説改良社と書き表わす。まぎらわしい。小説進歩社というのがある。小説改良社と誤るのはそれからの連想かもしれない。

説明のため必要最小限の項目として作品名と出版社のふたつだけをあげる。作品の記号は樽目録第11版である。現在のところこれがいちばん新しい。

[樽目11]W0863 烏龜変相 改良小説社

改良小説社とあるところに注目されたい。ところが該作品について阿英目録85頁は出版社を「小説改良社」と誤記する。改良と小説が入れ違っている。

どちらが正しいのか。言うまでもない。改良小説社でなくてはならない。

ところが阿英目録以後この間違った小説改良社が定着してしまった。ほとんどの目録が阿英を引用して誤記する。

参考までに文献をいくつか以下にあげる。前出と同様に略号の编者、出版社などの詳細が知りたければ、樽目十の「説明」を参照してほしい。

最初に間違いの源である阿英目録を再度かかげる。区別するために「小説改良社<sup>79</sup>」と書く。

### 小説改良社<sup>79</sup>と誤る例

1957[阿英85]

小説改良社<sup>79</sup>とする「晩清小説目」『晩清戯曲小

説目』

1990欧陽健[提要1190]

小説改良社<sup>77</sup>とするは阿英目録による『中国通俗小説総目提要』

1995馮保善[近大167]

小説改良社<sup>77</sup>『中国近代文学大辞典』

1998王繼權、夏生元[系目77]

小説改良社<sup>77</sup>『中国近代小説目録』

1998欧陽健[古大991]

小説改良社<sup>77</sup>『中国古典小説大辞典』

2002王清原ら[書坊訂975-2]

小説改良社<sup>77</sup>とするは『中国通俗小説総目提要』が典拠『小説書坊録』

2002 樽目録第3版/2011第4版

小説改良社<sup>77</sup>とするは阿英目録による(注:樽目第5版2013より訂正した)

2004田沙[目白392]

小説改良社<sup>77</sup>『中国古代小説総目』

2008劉永文[劉晚343]

小説改良社<sup>77</sup>とするは樽目録第3版から引用『晚清小説目録』

樽目録も例外ではない。ふたつの出版社名があるとはわかっている。だから注釈にもそう記した。ただし阿英説を否定する材料が充分ではない。そう感じていたのが当時のことだ。あるがままにするほかないだろう。

正しく改良小説社と明記する文献があることも指摘しておかなければ不公平だ。

### 改良小説社と正しく記述する

田若虹は、陸士諤著、改良小説社とする

1989陳平原、夏曉虹[理論578]

改良小説社『二十世紀中国小説理論資料』

2002陳大康[編年277]

改良小説社『中国近代小説編年』

2014陳大康[編年④1941]

改良小説社『中国近代小説編年史』

比較してみれば阿英の誤記を継承した目録、文献が比較的多い。だから私はいつもいって

る。研究は多数決ではないと。

ひとつあつかいに困る例がある。前出習斌の『晚清稀見小説経眼録』だ。

2012習斌[習斌67]「(社会小説) 亀生涯」

で収録、未詳具体刊刻書坊。

習斌が該書に写真で示した「亀生涯」には、出版社名の記載がないという。

そこまでならかまわない。

ところが習斌は65頁においてある説明を加えた。未見とことわり「別に宣統二年(1910)小説改良社<sup>77</sup>刊本があり、「烏龜変相」と題する[此書另有宣統二年(1910)小説改良社<sup>77</sup>刊本、題作《烏龜変相》]」と書く。

未見だから先行文献を参照したのだ。しかも典拠資料名は明らかにしていない。小説改良社本<sup>77</sup>だと説明したのは、私にいわせれば余計であった。それが間違いだとは習斌も知らなかったことになる。知っていればなにか追加説明するだろう。

よく似た例がある。

[樽目十]X1857 新七侠五義 改良小説社

こちらについて阿英目録は上記のとおり改良小説社だと正しく明示している。

だが奇妙なことに以下の文献が違うことを書く。

1990簫相愷[提要1162]

小説改良社<sup>77</sup>。上海図書館所蔵

1995馮保善[近大1034]

小説改良社<sup>77</sup>

2002王清原ら[書坊訂975-1]

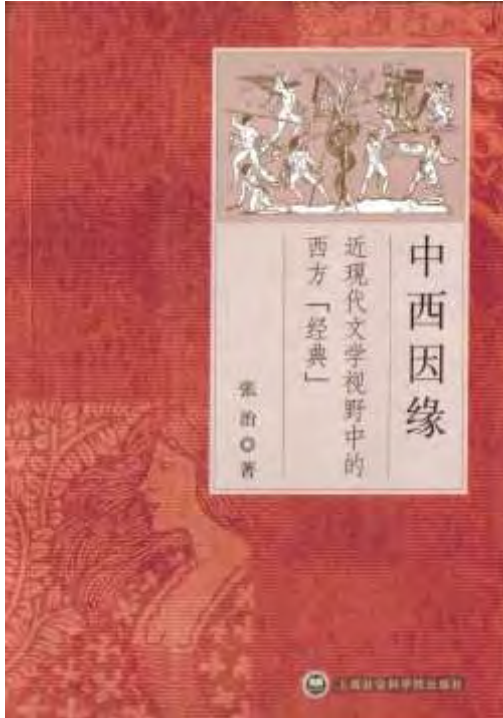
小説改良社<sup>77</sup>とするは『中国通俗小説総目提要』が典拠

2004田沙[目白440]

小説改良社<sup>77</sup>

蕭相愷は『中国通俗小説総目提要』で上海図書館所蔵と注記している。実物で確認したのだろう。どうして出版社の名称が違うのか。わけがわからない。

別の例では張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「経典」』（上海社会科学院出版社 2012.8。記号は[張治A]）がある。



呉趺人『新石頭記』の単行本を説明して注1で「1908年小説改良社<sup>79</sup>出版単行本」（12頁）と誤る。広く深く浸透して残っているようだ。

1カ所の書き間違いをわざわざ取り上げるか。これを見る読者のなかには不満を感じられる人がいるかもしれない。

張治「林譯小説底本補考」（『現代中文学報』2012年第6期（総21期）2012.12.18 電字版）においていままで不明だった林訳小説の原本を複数明らかにしている。参照する価値のある論文であるのはいうまでもない。その張治にも指摘すべきことがあるのかという少しの驚きだ（後述）。

阿英目録が1957年、張治の該書が2012年出

版だ。単純に引き算して55年。長すぎると思う。その間全員が誤っていたというわけではない。正しく記述している目録が中国にある。張治は自著の最初に主要参考文献のひとつに掲げている。

誤解のないようにお願いしたい。私は張治を批判しているのではない。張治は作品の実物で確認して立論する堅実で慎重かつ意欲的な研究者だと思っている。その著書には教えられることが多い。そういう研究者でさえ阿英の誤りに気づかずそのままを引用する。それほどに阿英目録は影響力が強いという意味だ。事例のひとつであると考えてもらえばいい。

参考までに次の論文がある。蘇亮「改良小説社研究初探」（『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』2013年第3期 2013.5.15） 罇

#### 【注】

79) 習斌が書籍を個人で所有していることを私は疑わない。ただそのなかに不思議な1冊があることに気づいた。172頁に扉写真を掲げる『嫖界現形記』だ。左上隅に図書分類票が見える。「旧参/T242・□/WG」どこかで見た。記憶をさぐってみるとそれは1984年に私が通った天津図書館の蔵書票に違いない。「旧参」というのは本館とは別に設けられていた特別参考図書室の蔵書であることを示す。1949年以前の書籍を別に集めて設置されていた。清末民初小説がここに所蔵してある。閲覧のために通ったのだ。当時そこは一般の閲覧者は入室が制限されていた。それを知らない閲覧者が近づくと係員はそのたびに注意する。「ここにはお前の見る本はない。あっちへ行け」いやに高圧的な態度だなといつも感じた。言われた方もおとなしく従う。奇妙な風景だった。今はどうなっているのか知らない。該書は習斌の所蔵だという。天津図書館からなぜだか市場に流出したらしい。

次号の公開は2020年1月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

包天笑「空中戦争未来記」など(上)

荒井由美



ドイツ語原書(ネットより引用)

包天笑「空中戦争未来記」の掲載誌には翻訳であるという表示がない。しかし中身は日本語作品を底本とした漢訳である。その両者を比較対照して簡単に紹介するつもりだった。

ところが調べるとなにやら複雑な様相を呈してくる。漢訳がもつたその日本語作品は創作ではなかった。もともになった外国語原本が存在する。つながりをたどってさかのぼる。出てきたのは原作ではない外国語作品を日本語で翻訳している事実だ。事実が錯綜しているから説明が複雑にならざるをえない。あとで詳述する。

とにかく日訳にもとづいて包天笑は重訳したことは確かだ。原本と複数の日本語訳、および漢訳の関係について説明する。

漢訳が出てくるまでの経過を手短かに述べることからはじめよう<sup>\*1</sup>。

### 原作と日本語訳——漢訳以前

ドイツ語原作をもとにして英文要約が出てくる。日本語訳と漢訳はその要約から派生する。これが基本の流れである(作品には通してa b cを振る)。

1 ドイツのマーチン原作

a ルドルフ・マーチン(Rudolf Emil Martin、

1876-1916)のドイツ語原作が出发点だ。

Rudolf Martin, *Berlin-Bagdad: Das deutsche Weltreich im Zeitalter der Luftschiffahrt, 1910-1931*. Stuttgart; Leipzig, 1907

マーチン『ベルリンーバグダッド』のフランス語訳はあるが英語の翻訳はないという<sup>\*2</sup>。

ドイツ語原作は長篇空想科学小説(SF)だ。全35章ある。刊行された年に該書の新刊紹介が書かれる。英語の要約を主とした内容でイギリスの評論雑誌に掲載された。次のとおり。

### 2 英語要約

雑誌『批評の批評』の「今月の1冊(または新刊紹介)」欄にある。

b “The Age of the Air-ship: Facts and Fantasies” (“The Book of the Month”, *the Review of Reviews*, vol.35: no.208, 1907.4, pp.427-433、電字版)





題字2種 (ネットより引用)

標題を訳せば「飛行船の時代」だ。副題が「事実と物語」とある。その紹介記事では関連事実を解説し、マーチン作品を要約した\*3。

2段組みで7頁。3部分に分かれる。

I. - FACTS、II. - THE FANTASY OF RUDOLF MARTIN、III. - WHAT IT ALL COMES TO である。

I と III は書評者による解説だ。「新刊紹介」の主要部分が「第2章 ルドルフ・マーチンによる物語」と称する要約である。ドイツ語原作の全35章を21章に圧縮して英訳した(略称[英文])。

これから紹介する日訳と漢訳についていえばこちらの英訳紹介文の方がドイツ語原作よりも重要な意味を持つ。

雑誌に英文要約が掲載されると複数の日本人が興味を示して翻訳した。ただしドイツ語原作から直接日訳しようとする人はいなかったようだ。

3 日本での反響

以下の3作品があることを確認している。

c 三津木春影「将来の空中大戦争」『探検世界』第3巻第4号 1907.6.5 (略称[春影])



d ルードルフ・マーチン著、高野弦月(異)訳『(小説)破天荒』小川尚栄堂1908.4.5 (略称[弦月]) \*4



e 破天荒生「空中戦争未来記」『冒険世界』  
第1巻第5号 1908.5.5 (略称 [破天]) \*5



英文要約の標題が「飛行船の時代」だ。春影はそれをc「将来の空中大戦争」と訳した。内容の一部ではあるがそれを反映している。許容範囲内だと考える。

ところが弦月のd『破天荒』は書名からして英文要約からだいぶ離れる。「飛行船の時代」そのものが未曾有の状況であり「破天荒」という意味合いだ。これもまるきり間違っているというわけではない。ただしその題名だと内容を想像しにくい。だからからか表紙絵にイスラム教礼拝堂の影を配して上空に飛行船を飛ばせて淡く示唆する。

破天荒生のe「空中戦争未来記」は春影よりも英文により近いといっている。

英文要約の第1章を示して参照までに拙訳をつける。明治期の日本語訳と比較対照するのが目的だ(日本語のルビは省略。以下同じ)。英文要約と日本語がどういう関係にあるのか考える。そのため引用が長くなる。

[英文] GERMANY'S FUTURE LIES IN THE

AIR.

On January 1st, 1910, the German General Admirals being assembled in Berlin to offer Year's greetings to their Sovereign, the Kaiser made them a sonorous speech on the transcendent importance of air-ships to the world in general and to the German Empire in particular. The invention of the steerable motor air-ship, he declares, is only comparable in importance to the discovery of gunpowder. Every German army corps in the future, he announces, is to have an air sailors' brigade attached to it. The Imperial Chancellor had been ordered to demand the sum of £ 500,000 to hasten the building of the German air-fleet. There must be 30,000 swift flying-machines for the transport of 30,000 infantry. Krupp is to fit out 1,000 flying-machines at once with artillery, and by means of the 400 transport air-ships (Zeppelins) already ordered it will be possible between the hours of twelve and three to transport from Germany 400,000 men into England. "Germany's future," concluded the Emperor, "lies in the air !" The history of the next twenty years is one long proof of his Majesty's sagacity and foresight.

ドイツの未来は空中にある

1910年1月1日、ドイツ軍の将官たちがベルリンに集まり陛下への年賀を行なうとドイツ皇帝は彼らにむかって朗々と全世界、特にドイツ帝国にとって飛行船が超越的重要性を有すると演説した。操縦可能なモーター飛行船の発明と重要性において唯一比較できるものは火薬の発見だと陛下は明言する。将来はドイツ軍全軍団が航空船員の旅団を附随させると彼は発表した。そのため帝国首相はドイツ空中艦隊の建設を早めるために50万ポンドの支出を要求するよう命じられた。3万歩兵の輸送のために3万艘の快速飛行機械がなければならない。クルップ社はただちに1千艘の飛行機械に大砲を装備することになっている。すでに発注された400艘の輸送用(ツェッペリン式)飛行船

によって40万人の兵士を12時間と3時間の間にドイツからイギリスまで輸送することができる。「ドイツの未来は空中にある！」と皇帝は締めくくった。次の20年の歴史は陛下の聡明さと先見性を示す一つの長い証拠となる。

英文要約だから大筋しか示されていない。細かい描写がない理由のひとつだ。いくつかの数字が具体的であるといえそうかもしれない。ドイツ人原作に「50万ポンド」はないと思う。英文要約だからそうならしい。ただし空想科学小説だから根拠を求める人もいないだろう。文章で強調されるのは今後の軍事主力は飛行船になるということだ。飛行船の開発と運用、強化、発展が諸外国の軍事力を左右する。戦争の勝敗はひとえに飛行船の性能にかかっている。全世界的な規模でその動きが加速していくだろうという考えだ。

以上の英文紹介を春影は日本語で次のように翻訳した。

[春影] 独逸の将来は空中にあり

紀元千九百十年の正月元日には、独逸の陸海軍將軍等皇帝陛下に年賀の辞を奉らんが為に伯林に会合し、其席上に於てカイゼル陛下は励声一番、空中飛行艇が世界各国、殊に独逸帝国にとつて最も必要なる事を演説する。彼曰く、将来に於ける独逸の各軍団は、悉く附属空中飛行隊を備へんとしつゝある。朕は大蔵大臣に命じて、五十万ポンドの費額を以て独逸空中飛行艇の建造を急がせる事にした。クルップ会社は命令一下、直ちに千個の飛行艇と大砲とを製造する筈になつて居る。而して二十三時間以内には、四十万の人間を独逸から英国に輸送する事が出来るであらう……云々と述べ来つて、最後に曰く「独逸将来の運命は懸つて空中に在り！」と。

春影日訳は細かな異動はあるにしても上の部分についてはほぼ英語の原文どおりといってい

たり最後部分を翻訳していないことはある。

三津木春影（一実）は早稲田大学の英文科を卒業した。押川春浪の後輩だという\*6。

次の弦月訳はもとの英文よりも大幅に増加している。独自の加筆を行なった結果だ（◆印は筆者）。

[弦月] 一、カイゼル陛下の予言

希望に輝ける新年は来れり、多事なる一九一〇年は来れり、国運隆々として、勃興の機運に乗せる独逸大帝国は、正に其大活動の第二年に入つたのである。／英邁なるカイゼル陛下は、龍顔最も麗しう、陸海両将校の年賀を受け玉へる後、玉音朗々、空中飛行船に就いて、極めて熱心に、御抱負を宣べられたのである。

◆／朕が司配する独逸帝国は、幸ひ諸卿の愛国心に依つて、著しき発展をなすつゝあるは、朕の頗る満足する所なるが、世界の進歩は片時も休まない、苟くも独逸国たるもの此大勢に遅れてはならない。聞けよ、英国の理学者マキシムは、既に十年前、何と公言せるか。／彼れ曰はずや『大砲の改良は、最早殆んど自然の制限に到着し、此の上如何に改良するも、至つて僅少の進歩に過ぎない、将来必ずや、空中飛行船發明せられて、彼の火薬が甲冑時代を埋没し去つたよりも、尚一層花々しく、世界の交通界、軍事界を根底より革命する時代が来るに相違ない、是に就いては近来欧米に於ける多数の学者や技術家が競つて研究するやうになつたから、最も學術の進歩せる独逸国民は、他に先んじて、此發明を完成するかも知れない。兎も角も、将来此研究に成功せる国民が、世界の最優勝者となる事が出来る、云々。』／當時朕はマキシムの此言に痛く感奮し、極力、飛行船研究を奨励した甲斐あつて、辛うじて運行し得る一種を發明する者があつたが、未だ不完全を免れず、一九〇七年、仏国に於いて成功と呼ばれたるパトリー号に優ることが出来なかつた。

二、鉄艦鉄条網は無用の長物 カイゼルの予言



(続き)

カイゼル陛下は、益々快辯を揮ひ玉ふのである。  
 /東洋に於ける新進国、嘗て下瀬火薬を發明して我々を驚愕せしめたる日本国も空中船の研究を等閑に附することはしなかつた。矢頭と称する一技師は、日本タイムスの名ある時事新報紙上に、次の如き意見を發表し、速力強大なる飛行船の正に發明せらるべき理由を論じた。矢頭技師は云つたのである。『空飛ぶ鳥を見よ、容量から比べると、鳥は二万噸の軍艦より決して軽いとは云へない、而も其速さは、地球上を馳せるものゝ到底及ぶところではない。試みに、青草鳥は大氣の稀薄なる高所を飛ぶときは、一時間優に五百四十哩の速力を出し、曾た埃及よりヘリゴランド迄四千八百哩の遠距離を、短き春の夜の僅か九時間で達し得た。或は、燕が颯と風を切つて翔ける速さの、汽車よりも電車よりも疾きことは我等の日常見慣け口[て]ある例である。/実に造化は鳥類に向つて、人類に与へざる幸福を頒つた。彼等一双の羽翼は最も靈妙な機関である。際涯なき大洋をも、嵯峨たる峻嶺をも、善く一羽搏を以て飛び超へ、船の要もなく、鉄道の面倒なし。水雷も、銃砲も、甲鉄艦も、彼等に対しては殆んど兒戯に等しい。要塞や、地雷や、鉄条網などの利器も彼等には何等の効を奏さない。/嗚呼、鳥なる哉、人間が此鳥の如く自由に飛行し得ることが出来るならば如何に幸福であるであらう。』  
 /矢頭技師は最後に絶叫した。『人間の智識は、小石も沈む水の上に、鯨の幾百倍の物を浮べる点まで進歩してゐる。鳥に就いて研究し其理を応用したなら、堅牢快速にして、負担力大なる空中飛行船を作ることの出来ないことはない。思へば、鳥類は造化が吾人に対して示せる、飛行機の標本ではあるまいか云々。』

### 三、ドイツの天職 カイゼルの予言(完)

述べ去り述べ来り、カイゼル陛下は、更に一種の感慨に堪えざる如き句調を以て、

/日本すら此の通りであつた。当時朕は切に感じた。飛行船の研究に就いては、独逸たるもの決して外の国に輪を取つてはならない。最も早く是を發明するは正に是れ我が帝国の天職でなくてはならんと自覚せる朕の焦心配慮は実に言ふべからざるものがあつた。/天は自ら助けるものを助けた。遂に独逸は一時間百五十哩の高速を有する完全なる飛行船を發明するの光榮を担ふことを得るに至つた。  
 /此時の朕の喜びは如何であつたらう。思はず、發明者の手を取つて感泣した。此時ばかりは、朕の生命も、皇帝の尊きも、財産も、名誉も、幸福も、挙げて彼れに贈与するも尚足りないと思つた。◆/此發明に依つて、朕は陸軍の各隊に必ず一箇の飛行船隊を附属する方針を執れるは諸卿の知る通りである。/かかるがゆゑに、朕は帝国尚書に命じて、空中船隊の建設を急がしめん為め五百万円の支出を請求せしめた。/蓋し、空中に於いては、飛行船のみならず、一人毎に一箇の飛行機を要し、三万の歩兵には三万の飛行機を要するのである。我クルツプ会社は、朕の命令次第、何時たりとも、立地に、一千箇の飛行機を製造し、大砲を艦装し得べく設備されてゐる。  
 /是に依つて、既に注文せる四百隻のゼペリン式空中運送船を使用せば四十万の大軍を僅々三時間口[の]間に英国に輸送することを得。/益々活動し、益々飛躍せざるべからざる独逸の将来は、一に繋がつて空中軍隊であり、朕が忠勇なる将校、善く朕が意を体せよ。  
 カイゼル陛下の御託宣は是で終つたのであるが、果せる哉、爾來二十年間の歴史は、陛下が先見の明を有せられし事を証するに余りありだ。

もとはドイツ人マーチンの文章だ。それを英文で要約したものを弦月は底本にしている。弦月はその英文の第1章を日本語訳で3回に分け、しかも加筆し分量を大幅に増加させる。唐突に日本と日本人(下瀬、矢頭)を出現させている。具体的でかなり詳細だといえる。しかしドイツ皇帝自身がそれを説明することにしたから奇異

に感じられて当然だ。英語要約を見れば該当する箇所がない。弦月の異様さが理解できるだろう。彼がわざと日本部分を挿入したのには背景がある。だが研究者を含めて一般の読者には理解することができない。英文要約の全体を見る機会がなかったからだと思われる。

加筆は「一」後半の英国人マキシム、「二」全体の日本人矢頭、「三」の前半にわたる大量さだ。前後を◆印で示した部分が弦月の筆になる。

それこそ破天荒ともいうべき力技でもって英語要約にはない材料を投入し膨らませるだけふくらませた。そうしなければもとは7頁の英文を本文約100頁(上半分が挿絵だから実質約50頁)の単行本に仕立てることはできない。さらに加筆部分が日本にまつわる話題だ。横田順彌は「この作品の著者ルドルフ・マーチンについては、詳細は判らないが、日本の状況を描いた部分は、おそらく訳者が付け加えたものだろう」(1036頁)と説明している。後に日本に関する話題が出てくればこれも弦月の勝手な挿入ではないかと疑われることになったのもうなずける。

なお上に掲げた『破天荒』は架蔵のもの。本文は国立国会図書館デジタルコレクションで読むことができる。近代書誌・近代画像データベース(国文学研究資料館)が示す版本とは挿絵の一部が異なる。

高野弦月(巽)の著作が該書の尚栄堂出版広告に見える<sup>\*7</sup>。それらのなかのひとつに肩書きがつけられている。「英語世界記者」だ。雑誌『英語世界』は博文館発行(1907.4-1918.12)だという。その編集者だったらいい。ほかにも多くの著書、翻訳書を刊行している<sup>\*8</sup>。それらの肩書きは警察通訳とか大阪府警察通訳とある。それらから経歴をわずかに読み取ることができそうな気がする。しかし詳細は不明だ。

古書店の目録を見れば「英文愛読叢書」と称してモーパッサンなどの小説を翻訳している。

また高野弦月(巽)『馬賊横行記』(堀田航盛館1906.12。国立国会図書館デジタルコレクション)がある。『破天荒』に高野弦月新著『馬賊横行記』の新聞書評3本が掲げられる。該書表紙には「実地探険者」と添えている。該書では満洲の地に2年間滞在したと自分で書いているからそういう経歴を持った人物だ。

『馬賊横行記』には「四四 破天荒なる先鋒」「四八 龍虎の劇闘、破天荒なる仲裁」と称する章がある。かの地で馬賊となった日本女性沢村蝶子を「破天荒なる仲裁者」と呼ぶ(152頁)。「破天荒」でつながるといっただけ。また本文には「一朝、我が軍隊の撤退するが早いか、『さア御坐んなれ』と猛然と蹴つて起つた」(3頁)との表現が見られる。これはあとで示す日記『破天荒』の文章で「可しムんなれ」(さあ来い)と使うのと共通する表現だ。

英語の語学書を出版しているくらいだから英語はできた。上の引用でわかるように英文要約の基本は守っている。ゆがめて勝手な物語を創作したわけではない。ただ増補部分が多いからそれが目立っているだけだ。

横田順彌は『破天荒』を説明して次のようにいう。「呆れてしまう日独戦争未来記がある」(横田1033頁)、「ほとんど、めちゃくちゃだ。イギリスの評論雑誌に載った、あらすじを翻訳、加筆して一冊の本にして出版したという。ちゃんと定価もついているから驚く」(同1034)と書いている。横田が『破天荒』について「ハチャメチャSF」<sup>\*9</sup>で面白いというのならわかる。ところがまじめに呆れているから違和感がある。最後の「驚く」というのは横田にとってはほめ言葉だろうと理解する。

結局のところ『破天荒』はもとづいた英文要約を大幅に水増ししたから翻案本であるといえる。

次の破天荒生の翻訳は弦月とは異なる。弦月の翻案本が『破天荒』だからそれを連想させる筆名だ。弦月の別の筆名かと思った。だがその

翻訳は弦月とは異なる。別人だろう。それを読めば英文要約に基本のところで忠実であることがわかる。

破天荒生が独自にほどこした工夫がある。本文をはじめの前に物語全体の構成をまとめた。すなわち「独逸人の夢＝二十年後の世界＝空中艦隊伯林を襲ふ＝日本の未来は如何＝北極の納涼＝空中巡査＝印度征服＝支那征服」である。英文要約の全体をわかりやすく示した。注目されるのは「日本」と「支那」があることだ。包天笑の重訳を説明するとき鍵語となる(後述)。

[破天] 独逸の将来は空界にあり

千九百年正月元日、カイゼル陛下は伯林宮殿に於て、独逸陸海軍将官の年賀の式を享けられた、其時陛下は御機嫌いとも麗はしく宣ふやう「独逸に取て最も必要なることは空中飛行船である、運轉航行自由なるモートル飛行船の発明に依て、空中に飛行する自由を得たる独逸は、宜しく速に空中艦隊を建造せよ、それが為に議会に対して五百万円の支出を要求せざるべからず、独逸は結局三千艘の快速力の飛行器を要する、是れに依て十二時間の間に、四十万の独逸兵を忽ち英国に送る事が出来る、爾等其意を体せよ、独逸国の将来は実に懸つて空界に在り」と仰せられた、是れに依て独逸国は直に空中艦隊建造に着手した。

英文要約をさらに要約した。余計なことはつけ加えていない。ただし年を1900年に変えてしまった。

先に弦月が日本について追加した個所を紹介した。弦月がそうした背景といえるものがマーチン要約第2章に見える。未来大戦が発生する背景には日本に敗戦したロシアの社会的不安定がある。そこから第2次日露戦争に突入し世界的な大混乱状態にいたるわけだ。第2章の関連部分を抽出して紹介する。

[英文] THE FIRST GREAT AIR-BATTLES.

..... and just when the tension between the

Parliament and the people was at breaking pint the Japanese found a pretext for a quarrel with Russia that they had been seeking since 1905, and the second Russo-Japanese war was declared (October, 1912). In March, 1913, after a murderous battle in the desert of Gobi the whole Russian army capitulated, the Japanese battle-air-ships, transport air-trains, and war-motors being altogether too much for them.

最初の空中大戦争

……(ロシア) 議会と国民の間の緊張が限界に達したちょうどその時、日本は1905年以来求めていたロシアと開戦する口実を見いだし、1912年10月、第二次日露戦争が宣言された。1913年3月、ゴビ砂漠における残忍な戦争によりロシア全軍は降伏した。日本の空中戦艦、空中輸送列車、戦闘モーターはロシア軍を完全に上回っていたのである。

マーチン作品の一部分に勝者としての日本が出現する。ドイツを中心にして見た東の果て(極東)の小国日本が急に視界に入ってきたのには理由がある。対清国、対ロシアの大戦に勝ち抜いた日本という存在に注目せざるを得ない。ドイツ、ロシア、イギリスの強国と肩を並べようとする日本についても筆を割かなくてはならなかった。そういう背景があったからこそ弦月は英文要約には存在しない日本部分を追加することに躊躇しなかった。

春影による該当部分の翻訳を見る。

[春影] 空中大戦争争々開始さる

越えて二年、十月某日、結んで解けぬ旧怨は爆然として破裂し、日露両国間に再び宣戦が布告される。翌年の三月、ゴビ砂漠で大激戦が行はれるが、露軍は悉く降参してす。これは日本軍の空中戦艦、空中輸送艇等が遙に優勢であるからだ。

英文要約の要点は押さえているということが出来る。

次の弦月は相変わらず大きくふくらませた。

私が下線をほどこした(以下同じ)個所以外は弦月の加筆である。

[弦月] 第二日露戦争

……此前年の十月であつた。恰も日本帝国に於いては、例の通り、徒らに事勿れ主義に齧り附いて無能の譏高き政府と、年壮気鋭の議員に富める議会との間に劇烈なる衝突が持上がった。外に弱くして内に強き政府は、国民の意志を顧みず非立憲的態度を執つて議会を脅かし、其神聖を汚し、権利を蹂躪し、揚句の果には無謀なる解散を行はんとする間際、計らずも日本は、〇五年の戦争に於いて戦勝の効果を十分に挙ぐる能はずして、反つて露国のために、マンマと背負投げを食つたを遺憾とし、切齒扼腕、時期あれかしと待ち兼ねたる開戦の口実を見出し、此處に又第二回の日露戦争が開始せられた。／言ふまでもなく、戦争は空中に於いてある。／翌年三月両軍の本営はゴビ大砂漠の天に於いて衝突した。天下分目の雌雄を争ふべく、戦は頗る劇烈なものであつた。／日本は一大血戦をなして、勝負を一気に決せんと、獅子奮迅の勢を以て、無二無三に襲ひ掛かった。敵も去るもの、少しも驚く気色なく、『可しムんなれ』とばかり応戦した。負けず劣らず、両軍此処を先途と、互ひに死力を揮つて猛烈に鎬を削つた、雲井には時ならぬ紫電閃き、百雷轟くのである。雲時は勝負何れに帰するか定かならなかつたが、惜しむべし、露軍は最後の五分間を踏み堪ゆる勇氣と忍耐とを缺いたため、今一息といふ肝慎の処で、遂に逃足が浮いた。／それッ!と日軍の勇氣百倍し、息を継がず、遮二無二に畳み掛けて突進した。露軍は四途路に乱れ、隊形を壊した。日軍は勢力を分ち一部を以て敵の退路を塞いだので、露軍は進退谷り、多くは塵殺され、残れるは降伏した。

疑問に感じる箇所がある。「日本の空中戦艦、空中輸送列車、戦闘モーターはロシア軍を完全に上回っていたのである」は無視した。理由は不明。削除する個所ではないと思う。せつかく飛行船による未来的戦闘でありながら弦月は白兵戦にしてしまった。

ただ注意してほしいのは底本にほぼ忠実であることだ。一部無視する個所はあるがとにかくその本筋は維持している。別物語にはしていない。それにしても数ページの材料を1冊の書籍に仕立て上げるほどに内容を盛り上げた力量はたいしたものだ。以上を読めば生真面目な執筆姿勢であるとの印象を受ける。事実から乖離したでたらめを大量に挿入しているわけではない。当時の飛行船に関する知識と社会状況とを織り込んでの増量だ。その有能さに私はまったく感心する。

[破天] 世界第一回の空中戦

……国民と議会との間に激しい衝突が起つたに際して、日本帝国は千九百五年以来常に求めつゝあつた露国と開戦するの機会を造つて、千九百十二年十月を以て第二日露戦争を宣言した、其の翌年三月ゴビ砂漠に於ける大戦争に依て、露国全軍は悉く降参し、日本は再び大捷利を獲た、日本軍は此戦争に空中戦艦、空中輸送列車を使用して、露軍を打破つたので世界を驚倒せしめた。

破天荒生の日記はほぼ英文要約どおりだといえる。

以後の粗筋を紹介しておく。

飛行船の開発に失敗したロシアはその後没落したかに見えた。ところが天空のナポレオンと呼ばれるマイケル・シュワロー(英語音)が出現しロシアに第一流の空中艦隊を建造し中央アジアを回復するための作戦を開始しそれに勝利した。ドイツも空中艦隊建設に力を注ぎロシアに対抗した。ついにベルリン上空で両軍は衝突した。最終的に勝利したのはドイツだ。勢力を強めたのはドイツ、ロシア、日本である。世界をそれぞれで分割統治する。

日本語で「空中戦争」が使用される。そこから全篇が戦争の描写で埋まっているかの印象を受ける。だがマーチンの原作が『ベルリンーバグダッド』だ。英文要約の章題が「飛行船の時



代」となっているのはマーチン原作を反映している。たしかに戦争描写はあるがそれだけではない。強調されているのは飛行船の画期的な有用性なのだ。大西洋の横断に飛行船が活用される。空中を飛行すると肺結核の治療に有効であることが発見された。ベルリン-バグダッドの空中旅行、無線電信での株式相場の取引、新聞印刷、北極への納涼旅行、バグダッドは歓楽郷として無数の飛行船が繫留されている。空中警察が創設されて空中海賊を取り締まる。空中公園、空中病院も飛行船の発展形式として建設される等々。

マーチン原作は飛行船を題材にした空想科学小説だ。ただ当時の歴史的背景に戦争と社会不安がある。どうしても戦争に結びついてしまう。

以上の日本語訳を見たうえで中国での翻訳について述べる。

四

#### 【注】

- 1) 以下を参照した。武田雅哉・林久之『中国化学幻想文学館』上 大修館2001.12。横田順彌『近代日本奇想小説史』ピラールプレス2011.1.20。樽本照雄編『清末民初小説目録 第11版』2019ウェブ公開(略称「樽目第11版」)
- 2) フヂモト・ナオキ「ドイツ編(その五) ルドルフ・マーチン『破天荒』(「将来の空中大戦争」/「空中戦争未来記」)。「ウィアード・インヴェンション〜戦前期海外SF流入小史〜019」(『THATTA ONLINE』2009年4月号(第252号オンライン版第130号)2009.4.26)
- 3) 英語書評は無署名だ。作者はW. T. Stead だという。橋本順光「十九世紀奇想小説の連鎖と系譜: Mike Ashley, Out of This World: Science Fiction But Not As You Know It」『ヴィクトリア朝文化研究』11、2013-11、112-114頁、電字版。ステッドは『批評の批評』雑誌の創立者のひとり。
- 4) 横田順彌1033-1036頁に言及がある。
- 5) 破天荒生については未詳。次の文章がある。  
破天荒生「前号雑評」『龍南会雑誌』第37号

1895.6.7 電字版。注:熊本の第五高等学校出身者であることを示している。ただし「空中戦争未来記」の作者と同一人物であるかどうかは不明。破天荒生「八個国大選手/軽気球大競争」『冒険世界』第1巻第3号 1908.3.5。注:こちらは同じ『冒険世界』に掲載されているから同一人物である。

その他の著作については本文で述べる。

- 6) 横田611頁。「本名・三津木一美<sup>マミ</sup>」とする。1066頁では「本名・三津木一実」。「やはり外国作品の翻案と思われる「将来の空中大戦争」(〈探検世界〉第三巻第四号、明治四十年六月)」(611頁)とだけ書いてマーチン原作については言及がない。なお、三津木春影著、末國善己編『探偵奇譚吳田博士』(作品社2006.7.15)がある。
- 7) 広告に見える書名は以下のとおり。  
エイ、ケイ、トルストイ伯原著『小説/戦慄すべき露国皇帝』近刊  
『英語発音の誤り』、『中学/英語異同辨』、(英語世界記者)『英語普通/熟語の成句』、『英語用法の誤り』、『二十世紀/英和手紙の書き方』、『和文英訳の仕方』、『英文和訳公式』、『英和滑稽百話』などが掲げられる。
- 8) 国立国会図書館デジタルコレクション収録で肩書きのあるものを抽出する。  
大阪府警察通訳『ポケット警察礼式』岡本増進堂1900.9  
英文和訳公式著者『ハーレー大彗星の話』岡本増進堂1910.3  
警察通訳『国民須知/罰金を取られぬ法』堀田航盛館1911.10  
大阪府警察通訳『敬神崇祖/全国神社祭神銘鑑』高野幹1919.10
- 9) 小松左京「解説」、横田順彌『日本SFこてん古典I』早川書房1980.5.15、438頁

## 漢訳小説「ヴェニスの商人」(上)

——「一磅肉」と「一斤肉」

沢本 郁馬

シェイクスピア劇を小説化したものはいくつもある。その中でよく知られているのはラム姉弟編『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』(1807)だ。清国中国では1900年代はじめに漢訳が2種類でた。訳者不記『瀋外奇譚』と林紓+魏易共訳『吟辺燕語』が比較的早い部類に属する。

そのなかに「ヴェニスの商人 THE MERCHANT OF VENICE」が収録される。それぞれの漢訳は次のとおり。

「燕敦里借債約割肉」(英) 索士比亞 SHAKSPERE<sup>77\*1</sup> (蘭卜散文) 訳者不記

『瀋外奇譚』達文社1903

「肉券」(英) 莎士比著 林紓、魏易同訳『(神怪小説) 英国詩人吟辺燕語』上海・商務印書館 光緒30.10 (1904)

前者を翻訳すれば「アントーニオが肉を切り取る約束で金を借りる」だ。内容をそのまま説明した題名である。

林訳は収録全20作品に漢字2文字の題名をつけた。「肉券」とは「肉の契約書」という意味。やや抽象的である。「肉を切り取る契約書」という内容だから印象が強い。借金を支払うために自らの肉体を切り取らせるという異常な設定

だ。中国人も一応は驚くふりをした(後述)。

上に示したように英語原文を漢訳すれば原文から離れることがある。シェイクスピアであれば今では莎士比亞と表記するのが定着しているといえる。過去においてどのような表記があったのかをくり返すつもりはない。とにかく多彩だった。日本におけるゲーテの呼称と同様だといえればそれだけで理解してもらえらるだろう。

林訳は一貫して莎士比と表示する。莎士比亞ではない。ただし例外が1件あるようだ<sup>\*2</sup>。掲載誌によって違うとも思えないが。それについては未見だからなんともいえない。

『瀋外奇譚』の訳者は索士比亞を使用した。音訳するのだから個人(地方音)によって漢字が違うのは当たり前だ。

もとの書名が『シェイクスピア物語』だから『莎士比亞(戯劇) 故事集』とすれば直訳になる。それを漢訳して『瀋外奇譚』『吟辺燕語』だ。

前者は『海外の不思議な話』という意味になる。当時の中国には莎劇そのものどころかラム本の漢訳もない時代のことだ。莎氏といっても一般の読者はほとんど知らない。原文に忠実な『索士比亞(戯劇) 故事集』であれば中国人読者にはかえって理解がむづかしいと思ったものか。

一方の林訳『英国詩人吟辺燕語』はそれとは違う。「英国詩人」はシェイクスピアを指す。「吟辺」は戯劇、「燕語」は物語を意味する。だから『シェイクスピア戯劇物語』であってこちらは直訳である。

### ○林紓批判の動向

林訳がラムを出さず莎士比作とだけ表示した。ゆえに林紓はシェイクスピア作『シェイクスピア戯劇物語』だと考えていたに違いない。莎劇を小説に書き換えた。これが文学革命派によって提出された「林紓は戯曲と小説の区別がつかない」論である。林訳批判の大きな理由とした。

今から約100年前に提出されたその原型だ。

ラムの名前がないというだけでそこまで想像をたくましくできるものか。妄想といってもいい。詩人莎氏が自分の名前を前面にだした小説集を書いたことにしたのだ。詩人莎氏が小説を書いた。普通に考えればありえない発想である。一般読者ならいざしらず中国の知識人がそういうことをいうのか。あきれて当然のはなしだ。だが最初から林訳批判を目的に定めている人々にとっては十分に成立するものだった。とにかく林訳を攻撃できるのであればなんでも実行したのが事実である。逆にいえばそこ(ラム名の不提起)しか攻撃点を見出せなかったということだ。最初から「無理筋」である論理を林訳に対して強引に押し付けた。集団でしかも林訳死去後も根拠材料を取り換えつつ長年にわたって林訳を批判し続けた。

意図をもって曲解し林訳を直接批判した人々は次のとおり。銭玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英だ。その後は内外の膨大な数にのぼるその追従者たちが存在している。林訳批判者たちは全員が『吟辺燕語』がラム本であることを知っていた。知らなければ知識人とはいえない。知らぬ風を装って「戯曲を小説にかえて翻訳した」「戯曲と小説の区別がつかない」と批判した。昔も今もかわらない。

阿英こそが莎士比の名前しかないことを根拠に「莎氏作『莎劇物語』」とはっきりと言いきって林訳批判をした人だ。その阿英が「晚清小説目」(124頁)では実物を見ながらそこにありもしない蘭姆(ラム)の名前を記録した。くり返す。『吟辺燕語』には「莎士比」としか書かれていない。だが阿英は「蘭姆」と記述している。林訳底本の存在を知っていたことを自白した。これを指して馬脚をあらわすという。

今から考えれば噴飯ものだといえる。しかし当時から誰も噴きださず真剣に真摯に信じて(信じるふりをして)林訳批判を実行継続した。林訳はまったく反論しなかった。共訳者の魏易

も同様だ。また不思議なことに林訳を擁護して文学革命派の間違いを指摘し反対した人もいない。内外の全員が反林訳の波に便乗した。林訳批判については文学革命派が圧倒的に勝利したという意味だ。林訳批判は支持され肯定され現在まで学界の基本認識になっている。

21世紀(2007)になって日本人が林訳冤罪説を提起する。その漢訳が出た(2018)。多くの研究者にとっては寝耳だったらしい。覚醒したその中のひとりには林訳冤罪の事実を認めながらもとても不愉快だと自らの感情を隠しもしない(樽本「意見拡散には相応の反応がある」)。林訳批判はすみずみまで浸透して揺るがなかった証拠だ。

さて外国作品は意識するのが当時の習慣である。今になっても原作の探索に手間取る理由のひとつになる。「ヴェニス商人」を「維利斯城商人」「微鼻司商人」(現在では「威匿斯商人」「威尼斯商人」)などに直訳しなかったのは不思議ではない。

本稿では上とは別の漢訳を紹介する。

## 1 「一磅肉」のばあい

ひとつは新聞に連載された。次のとおり。

皐、檠「(短篇小説)一磅肉」5回 『申報』宣統元年十二月初三日至初七日(1910.1.13-17。以下申報訳と称する)<sup>\*3</sup>

「肉1ポンド」という漢訳題名は小説内容を凝縮している。訳者の興味がどこにあるかも明確だ。また林訳でも読んで知っている人が見ればすぐに理解する。

翻訳とは明示していない。だが連載終了時の「序」に説明がある。「檠子曰：此篇為詩人索士比亞原著」だ。新聞連載にある訳者の檠は檠子とも称していることがわかる。シェイクスピアに索士比亞という漢訳を当てた。林訳ではなく『海外奇譚』に使用された方を踏襲した。こ

こにもラムの名前はでてこない。林訳と同じ扱いだ。

「詩人」とは現在でいう「劇作家」を意味する。シェイクスピア原著だからそれでいい。漢訳は戯劇ではなく短篇小説をうたう。底本にしたのはラム姉弟『シェイクスピア物語』だろうと推測はできる。しかし確定するためには手続きが必要だ(後述)。

#### ○訳者について

槩子であれば龐樹柏(1884-1916)の筆名である可能性が高い<sup>\*4</sup>。

作品に「劫花涙」(『春声』1集 丙辰年旧暦1.1(1916.2.3))がある。その同一作品(『先施樂園日報』1920.10.27)の名前に「遺」を補う。遺著「(短篇小説)恋敵交歓」(『民国日報』1916.11.10)、遺墨「聊齋志異侠女篇彈詞」(『小説月報』8巻6号 1917.6.25)などの刊行年を見ても龐樹柏の没年と矛盾しない。

なお龐樹柏は惜秋生(歐陽鉅源)と「玉鈎痕伝奇」(刊年不明)を共作してもいる。

皞の方はもっと詳細がわからない。作品に「(短篇小説)新情史」(『申報』1910.1.1-5)と「(短篇小説)訛中訛」(『申報』1910.1.6-12)がある。皞皞子の別号を持っているのであれば王文濡(1867-1935)となる<sup>\*5</sup>。

皞皞子が「識」を書いている『林巖合鈔』(1909)<sup>\*6</sup>を視野に入れる。王文濡は清末民初の編集者、国学扶輪社創設者のひとりだという。「一磅肉」の翻訳に関係していても不思議ではない。

#### ○小説化本について

莎劇にもとづいて改編(小説化)した作品(通し番号を振る)のひとつラム本の「ヴェニス商人」冒頭を示す。漢訳の多くがラム本を使用しているからだ。初版は1807年だが読むことのできる1900年版から引用する。



1 ラム姉弟 CHARLES AND MARY LAMB『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』GROSSET & DUNLAP, NEWYORK, 1900 (Open Library による)

#### THE MERCHANT OF VENICE

SHYLOCK, the Jew, lived at Venice. He was a usurer, who had amassed an immense fortune by lending money at great interest to Christian merchants. p.112

ユダヤ人のシャイロックはヴェニスに住んでいた。彼は高利貸でキリスト教徒の商人たちに非常に高利で金を貸して膨大な財産を蓄えていた<sup>\*7</sup>。

英語の小説化本にもとづいていくつかの漢訳がなされている。申報訳が底本としたのは上のラム本である可能性が高い。しかし検討もせずに結論付けることは早計だ。踏むべき手順がある。ラム本のほかにも小説化本は複数あるから無視はできない。中国の知識人たちがラム本1冊にだけ集中しているとは思えない。別の小説化本を見ている可能性もあるだろう。



申報訳の1910年以前に刊行されたものをいくつか入手している。同じようにその冒頭を引用して拙訳をつける。漢訳と比較するためだ。



2 マラ・ルイス・プラット Mara Louise Pratt 『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』 vol. I, Educational Publishing Company, Boston, 1890 /vol. II, 1891

THE MERCHANT OF VENICE

In the city of Venice there lived a selfish, greedy, grasping old Jew, called Shylock. p.61

ヴェニス商人

ヴェニスにはシャイロックと呼ばれる利己的で欲張りで物欲しげで年老いたユダヤ人いた。

ユダヤ人とキリスト教徒の関係は基本だ。しかしプラットの小説にはそこには触れない。

3 M・サーティーズ・タウンゼンド M. Surtees Townesend 『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』 Frederick Warne & Co. and New York, 1899

Antonio The Merchant of Venice

THERE was once a merchant living at

Venice whose name was Antonio. p.121

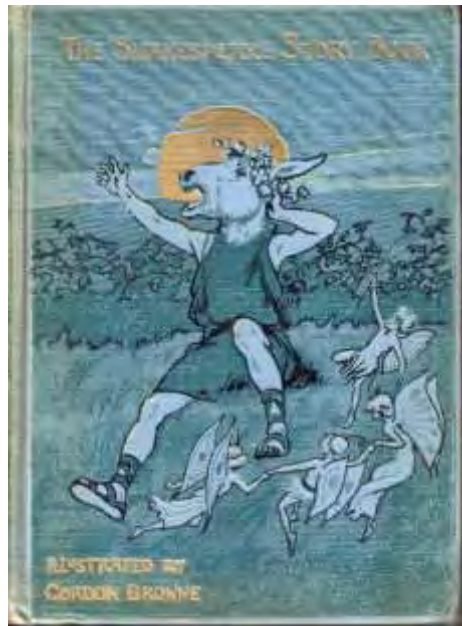
アントーニオ ヴェニスの商人

昔ヴェニスに住む商人がいた。彼の名前はアントーニオであった。



登場人物の名前を各作品に使用して特徴がある。アントーニオが中心だ。いうまでもなく「ヴェニスの商人」とはアントーニオを指す。シャイロックは商人ではなく高利貸しである。

ラム本がシャイロックから始めていたのとは異なり彼の敵であるアントーニオから書き始める。ラム本とは大いに異なる。



4 メアリ・マクラウド Mary Macleod 『シェイクスピア物語 The Shakespeare Story-Book』  
Wells Gardner, Darton & co, London, 1902

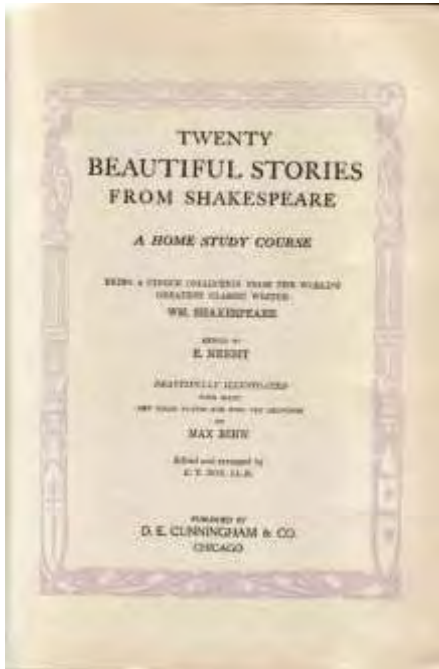
The Merchant of Venice

SHUNNED, hated, despised, insulted, the Jews in the Middle Ages led a cruel and embittered existence among their Christian brethren. p.104

ヴェニス商人

排斥され、憎まれ、軽蔑され、侮辱された中世のユダヤ人たちは、キリスト教徒の仲間のうちでは残酷でみじめな存在へと追いやられた。

シャイロックを紹介する前にユダヤ人の社会的地位を概説している。



5 イーディス・ネズビット Edith Nesbit 『20のシェイクスピア物語 Twenty Beautiful Stories From Shakespeare』 D.E.Cunningham & Co., Chicago, 1907

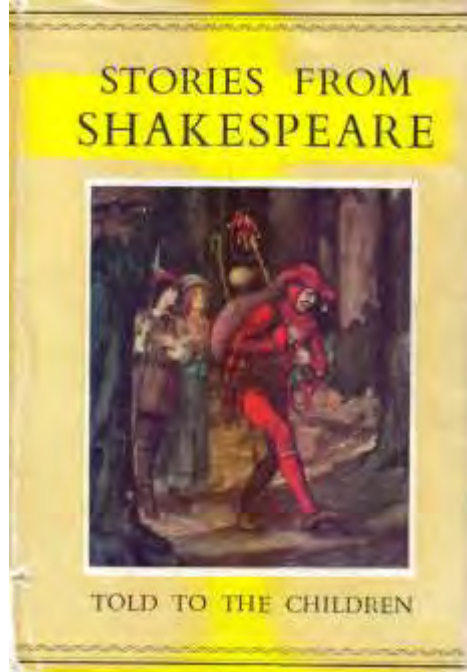
THE MERCHANT OF VENICE

ANTONIO was a rich and prosperous merchant of Venice. p.183

ヴェニスの商人

アントーニオは金持ちで裕福なヴェニスの商人であった。

金持ちも裕福も同じ意味だ。アントーニオが豊かであることを強調したかったと考える。ラム本がシャイロックからはじめたのとは違う。



6 ジーニー・ラング Jeanie Lang 『児童向けシェイクスピア物語 Stories From Shakespeare, Told to the children』 Thomas Nelson and Sons LTD, London and Edinburgh, 1909

THE MERCHANT OF VENICE

FAR away in a land where the sky is nearly always blue, and the sun nearly always shining, and where the sea also is blue as the sunbeams play on it, lies the beautiful city of Venice. p.33

ヴェニス商人

空がほぼ常に青く太陽がほとんど常に輝き太陽光線が当たるにつれて海もまた青くなる。遠く離れたところにヴェニスという美しい街がある。

ユダヤ人もシャイロックもアントーニオも出てはこない。ヴェニスそのものの説明からはじまる。

以上をふまえて「一磅肉」を見る。

原文のほぼそのままであることがわかる。『解外奇譚』の「宰路者猶太人。遷於意大利維利斯城家焉。シャイロックはユダヤ人でイタリアのヴェニスに移っていた」とも違う。また林訳の「歇洛克者。猶太碩腹賈也。シャイロックはユダヤの大金持ちだった」でもない。ついでにいえば林訳の歇洛克はドイルが創作したシャーロック Sherlock にも使用されている(『歇洛克奇案開場』1908)。

He was a usurer, who had amassed an immense fortune by lending money at great interest to Christian merchants. 彼は高利貸でキリスト教徒の商人たちに非常な高利で金を貸して膨大な財産を蓄えていた。居常喜以金貸人。而漁重利。家以是大富。日ごろから人に金を貸して非常な高利をむさぼったから大金持ちだった。

申報訳には「キリスト教徒」がない。それ以外は原文どおりだ。

Shylock, being a hard-hearted man, exacted the payment of the money he lent with such severity that he was much disliked by all good men and particularly by Anthonio, a young merchant of Venice; シャイロックは冷酷な男で貸した金の取り立ても厳しくすべての善良な人々からはひどく嫌われたがヴェニスの若い商人アントーニオからは特にそうだった。而隣里之善良者。咸鄙棄之。しかし近所の善良な人々はいずれも軽蔑していた。

申報訳にはアントーニオが出てこない。続く文章に組み込んだからだ。

and Shylock as much hated Anthonio, because he used to lend money to people in distress, and



○漢訳について

冒頭から少し引用する。

意大利維納斯城。有居民希洛克者。本猶太人也。居常喜以金貸人。而漁重利。家以是大富。而隣里之善良者。咸鄙棄之。同時又有一商人曰恩脱訥。所為則反是。有以緩急告者。未嘗不立応。而絶不取息。蓋怒希洛克之誘人重利。而故以此掣其肘也。希洛克見己之債戸。將陸續為彼引去。遂銜之刺骨。恩脱訥又時面責希洛克所為之非。便自知悔改。希洛克口雖不与置辯而心滋滋恨。常思有以報復也。

以上を見れば底本はいくつもある別の小説化本ではない。やはりラム本だ。念のためにラム本と漢訳を文単位で比較対照する。

SHYLOCK, the Jew, lived at Venice. シャイロックはユダヤ人でヴェニスに住んでいた。意大利維納斯城。有居民希洛克者。本猶太人也。イタリアのヴェニスの住民シャイロックはユダヤ人である。

would never take any interest for the money he lent; シヤイロックの方も同様にアントーニオを憎んでいた。なぜならアントーニオはいつも困窮した人々に金を貸して利子を取ろうとしなかったからだ。

同時又有一商人曰恩脱訥。所為則反是。有以緩急告者。未嘗不立応。而絶不取息。そのころアントーニオという商人がいたがやることはシヤイロックの反対だった。差し迫って求める人にはすぐに応じたししかも利子を取ろうとはしなかった。

申報訳はほぼ原文を忠実に写し取っている。

therefore there was great enmity between this covetous Jew and the generous merchant Anthonio. こうして強欲なユダヤ人と気前のいい商人アントーニオのあいだには大きな敵意が横たわっていた。

蓋怒希洛克之誘人重利。而故以此掣其肘也。希洛克見己之債戸。將陸續為彼引去。遂銜之刺骨。アントーニオはシヤイロックが人を高い利息で釣っていることに怒っていたから牽制を加えていた。シヤイロックは自分の借主がアントーニオに次つぎと奪われていったのを見て心底憎んだ。

申報訳は内容をすこし追加している。シヤイロックがアントーニオを憎んだ理由を具体的に説明した。借主を奪われたのが原因であると書く方が読者の理解を助けるという判断だろう。

原文に忠実な直訳を歓迎するようになったのはこの時よりも時代が下る。それ以前は意識が当たり前だった。原文をほぼ押さえれば省略することも加筆することも比較的に自由だったのだ。だいたい原文と漢訳を比較対照して批評する人などほとんどいなかった。省略の例は林訳だし加筆の例は『瀕外奇譚』である。現在は公認されている直訳の立場からさかのぼって

過去の翻訳を批判しても意味はない。その時代にはその時代の需要に応じた翻訳方法があるからだ。

Whenever Anthonio met Shylock on the Rialto (or Exchange), he used to reproach him with his usuried and hard dealings, which the Jew would bear with seeming patience, while he secretly meditated rebenge. アントーニオはリアルト橋(あるいは取引所)でシヤイロックに会うたびに彼が高利で容赦のない取引をしていると必ず非難したのである。ユダヤ人は見せかけの辛抱強さで耐え忍んでいたが心の底で復讐を企てていた。p.112 恩脱訥又時面責希洛克所為之非。便自知悔改。希洛克口雖不与置辯而心実滋恨。常思有以報復也。アントーニオは時にシヤイロックの行為の非であることを面罵することもあり改悛したものと自分では思っていた。だがシヤイロックは口では弁解しなかったがその実怨みを育てており復讐することを常に考えていた。

漢訳にリアルト橋はない。だがそれを除けば申報訳はうまく漢訳しているといえる。

よく知られた「肉の契約書」の場面を引用する。シヤイロックがアントーニオへ提示した3千ダカット(金貨)を貸す条件である。

only Antonio should go with him to a lawyer, and there sign in merry sport a bond, that if he did not repay the money by a certain day, he would forfeit a pound of flesh to be cut off from any part of his body that Shylock pleased. ただアントーニオに彼と一緒に弁護士のところへ行って、もし一定の期日に金を返済しなかったならば彼の身体からシヤイロックの好む場所の肉を1ポンド切り取るという契約書に冗談で(in a merry sport)署名して



ほしいといった。

惟汝須至律師前書一券。約某日歸楚。逾期則吾亦不索汝金。祇取汝身一磅肉何如。ひとつあなた様は弁護士のところに行って契約書を書かなければなりません。一定の期日に返済するとして期限を過ぎれば私はあなた様に金を請求するつもりはないので、ただあなた様の身体から肉1ポンドだけを切り取るというのはどうでしょう。

契約書(券)に書かれたことは実行されなければならない。この原則がある限り冗談であろうとなかろうと結局は実行に移されることが予想される。そこが契約書の恐ろしさである。周知のことだろう。それを冗談にまぎらわしているところがシェイクスピアの手腕だ。冗談だろうと署名をすればそれで終わる。

申訳は原文の「契約書」「1ポンド」までは出している。ただ「冗談」は省略した。その重要性には気づかなかったのか。いやそうではなく契約が実行される直前までいったことを踏まえている。肉1ポンドの切り取りという契約が冗談ではなく事実である点を重視したのだと思う。わざとらしい冗談は必要とは感じなかった。それはそれで当たっている。結果はそのとおりになりかけた。

「冗談」部分を削除したから友人バッサーニオ(俾斯南)が契約の危うさを心配して署名をしないように忠告する原文部分は漢訳していない。すぐさまバッサーニオの結婚相手ポーシャ(波喜亜)に話が転じてふたりの結婚となる。バッサーニオがポーシャからの指輪を受けたことは原文のままだ。この指輪は小説全体の大団円につながる。

バッサーニオの友人グラシアーノ(拵拿)とポーシャの召使いリネッサ(耐珊)も結婚を許された。皆が喜んでいるところに不幸の手紙が届けられる。アントーニオの持ち船が難破してしまい彼は破産した。シャイロックとの契約に

より肉1ポンドを差し出さなくてはならない。ポーシャは一部始終を聞くと驚いた。すぐさま結婚式をあげたのはバッサーニオに自分の遺産相続した金を持たせるためだ。ヴェニスいるシャイロックは金を受け取ろうとはせず肉1ポンドを主張したからヴェニス公爵の前で裁判が行なわれることになった。

ポーシャは親戚の弁護士から知恵と衣装を借り受けた。弁護士の名前はベラーリオ(Bellarario)だ。漢訳はそこを「其戚某律師(親戚の某弁護士)」とだけして名前は訳していない。

ポーシャは召使いを書記生に仕立ててヴェニスの法廷に弁護士として登場する。バルサザー博士(博士貝司)がポーシャの仮名だ。ここの細かいところは漢訳も見逃さない。

細かいといえばポーシャが弁護士に扮した様子だ。

This the duke granted, much wondering at the youthful appearance of the stranger, who was prettily disguised by her counsellor's robes and her large wig. 公爵はそれ(代理弁護)を許可したが、見知らぬ者が若々しい容姿で法廷弁護士の衣装と大きなカツラによってうまく変装していることをいぶかってはいた。雖訝其来不速。而視其装束体態。確係一律師。亦不復疑。招いていないのに来たことを訝りはしたもののその服装と体つきは確かに弁護士だからそれ以上疑うことはしなかった。

「大きなカツラ」はラムによる加筆だという。申訳はそれを無視した。また変装であるとも訳してはいない。単語のいくつかは一致しない。また疑いを強めた原文よりも疑いを弱めた漢訳の違いはある。ただ大筋からいえばそれほどの差はないと判断する。

そのあとに続く加筆部分について触れておく。法廷にいるシャイロックの様子を申訳はつ

ぎのように述べる。

而希洛克面容穢惡。尤現似笑非笑之狀。令人難耐。そしてシャイロックの顔つきといえは凶悪でニヤついたようなそうでないような状態をむき出しにして格別に人を耐え難くさせるものだった。

この文章はラム本には存在しない。漢訳者の加筆である。邪悪なシャイロック像がより鮮明になった。

ポーシャがシャイロックに要請した。アントーニオに慈悲をかけるとか肉切りに当たって出血するから医者をやととかだ。シャイロックは契約書に書かれていない一点張りで拒否し続けた。これが見せ場に至るまでに張られた伏線である。申報訳はそのままであって変更はしていない。

見せ場に来た。

“Tarry a little, Jew,” said Portia; “there is something else. This bond here gives you no drop of blood; the words expressly are, ‘a pound of flesh.’ If in the cutting off the pound of flesh you shed one drop of Christian blood, your lands and goods are by the law to be confiscated to the state of Venice.” Now as it was utterly impossible for Shylock to cut off the pound of flesh without shedding some of Antonio's blood, this wise discovery of Portia's, that it was flesh and not blood that was named in the bond, saved the life of Antonio; 「ちょっと待て、ユダヤ人」とポーシャは言った。「まだ申し渡すことがある。この契約書には血の1滴も与えるとは書いてない。文面は明らかに「肉1ポンド」である。1ポンドの肉を切り取るとしてお前がキリスト教徒の血1滴でも流せば、お前の土地と財産は法律によってヴェニス国に没収される」さてシャ

イロックにしてみればアントーニオの血を流さずに肉1ポンドを切り取ることなど絶対に不可能だった。契約書に書かれているのは肉であって血ではない。ポーシャのこの賢い発見がアントーニオの命を救った。

而波喜重又曰。尚有一言告汝。券上祇載恩之一磅肉。未載恩之一滴血。汝其慎重將事。勿使稍洩其血。自獲咎。又肉既載明一磅。汝須善用汝刀。適劑一磅重量。稍差則汝為背律。於法無赦。ポーシャはいった。「まだお前に言うことがある。契約書にはアントーニオの肉1ポンドとだけ記載されている。アントーニオの血1滴も記載されていない。お前は慎重に事に当たれ。少しの血も洩らしてはならぬ。お咎めを受けることになるぞ。また肉1ポンドと明記されている。お前はお前のナイフをうまく使いびたり1ポンドの重さだけを切り取らなければならない。少しでも違えばお前は法律違反で法律により許されることはないのだ」

ユダヤ人は省略。キリスト教徒のかわりにアントーニオという具体名を使用した。ヴェニス国も省いた。申報訳はラム本に照らして部分的な改変を行なっている。しかし大筋はしっかりと把握していることが理解できるだろう。

シャイロックは肉1ポンドをあきらめなくてはならなかった。そこで差し出された3千金を受領しようとした。だがそれもポーシャに阻まれる。契約書に金の受領は書かれていないのがその理由だ。しまいにはシャイロックの財産の半分はアントーニオに残りの半分は国庫に強制収納させることになった。アントーニオは辞退しシャイロックが結婚を反対している彼の娘に譲る。娘は若いキリスト教徒(a young Christian)と結婚したからシャイロックは彼女を勘当していたのだった。

申報訳はほぼこの通りに従っている。ただ

「若いキリスト教徒」の部分は「信厚(信仰厚い)」に言い換えた。また公爵がシャイロックにキリスト教への改宗を勧める箇所も漢訳していない。宗教関係には触れなくなかったのかと推測する。

弁護士を装ったポーシャがバッサニーオの指輪を所望したのは最後の種明かしのためにシェイクスピアが用意した伏線である。家にいたはずのポーシャが指輪を取り出して弁護士に扮装していたという真相を披露して小説は終わる。

ラム本は最後部分に小唄のようなものを挿入して終了するが申報訳は省略した。

申報訳の最後部分に該当する箇所を比較対照する。

and Bassanio found, to his unspeakable wonder and delight, that it was by the noble courage and wisdom of his wife that Anthonio's life was saved. バッサニーオはアントーニオの命を救ったのが彼の妻の気高い勇気と知恵であったことを知るとことばにならない驚きと喜びになった。

俾与恩始而驚駭。繼而贊歎。終而不覺五体投地矣。バッサニーオとアントーニオははじめ驚きおびえたがつついて感心してほめたたえ、最後には思わず五体を地面に投げ出して伏し拝んだのだった。

申報訳は「五体投地」させてここだけ完全に中国化してしまった。

## ○結 論

以上を見ると削除、加筆、変更は少しばかりあるにしても本筋にしっかり基づいていてほぼ行き届いた漢訳であるといえる。『瀛外奇譚』『吟辺燕語』に続く当時の翻訳としてかなり良質のものだと私は判断する。

先に「肉の契約書」について冗談めかした箇所を申報訳は削除していることを述べた。小説

を冗談抜きの方に導いたのは最後の「序」が書きたかったからだ。

貸三千金。償一磅肉。真世界創聞哉。然吾国嘗外債。償以百千万磅国民之血肉而不惜。我知袞袞。諸公見此篇也。必曰。無足奇無足奇。

3 千金を借りて肉 1 ポンドを差し出す。まことに世界ではじめて聞くことだ。しかし我が国はかつて対外債務で百千万国民の血と肉を差し出して惜しいとは思わなかった経験がある。お偉方がこの小説を読めば必ずや「不思議ではない、不思議ではない」と言うに決まっていることを私は知っている。

ユダヤ人の冷酷食欲を諸外国の中国に向けた外圧に見立てた。 ㊦

## 【注】

- 1) 「海外奇譚叙例」に次のようにある。「一是書係詩体。経英儒蘭卜行以散文。定名曰 Tales From Shakspeare<sup>77</sup> ……」。「詩体」とは戯曲を指す。「蘭卜」の名前を出しているところに注目。ラムが散文に改編した。原題の「Tales From Shakspeare<sup>77</sup>」はそのままだ。これを見たある研究者(宋莉華2015)は該書の訳者は知ったかぶりの新式文人で無知だと批判する。すなわち Shakespeare であるべき名前を Shakspeare<sup>77</sup> と書き誤っていると指摘するわけだ。批判する研究者の方が知識がなく無知である。『Tales From Shakspeare』(1855)という単行本が実際に刊行されていることを知らない。『瀛外奇譚』の訳者はそちらを底本として使用したのだ。
- 2) (英) 莎士比亚原著 林紘、陳家麟同訳「欧史遺聞・羅馬克野司伝」『上海亞細亞報』1915. 9. 10-10. 3。ただし同文の『広肇周報』(1920. 8. 1-9. 26未完)は「英国莎士比原著」である。
- 3) 陳大康『編年史』によれば以下に転載された。未見。

- 旧金山『中西日報』宣統2.1.18-23 (1910.2.27-3.4)  
 新加坡『星洲晨報』宣統2.3.16-21 (1910.4.25-30)  
 4) 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』杭州・浙江古籍出版社2005.1。830頁  
 5) 陳玉堂52頁  
 6) 嶠嶠子編『林巖合鈔』上海・国学扶輪社 己酉年十一月(1909)初版/南洋官書局 宣統3.3再版/上海・中国図書公司 and 和記 1917.5三版/台湾・文海出版社1970.1影印  
 7) チャールズ+メアリ・ラム著、大場建治訳『シェイクスピア物語』(沖積舎2000.11.25)を参照した。

## 『老残遊記』初版の刊年

——孟晋書社に關係して

神田 一三

劉鉄雲『老残遊記』初集単行本の刊行年月は不明である。初版を見ればそれがわかる。刊年の記述はない。

「印刷所天津日日新聞社/發行所天津孟晋書社/每本定價大洋三角半」とだけ記述される。

書誌的には「無出版年月」あるいは「刊年不記」と書くほかない。ただ従来から推測はされていて光緒三十二年(1906)だろうという。初集と二集の刊行状況をふまえての予想にすぎない。具体的な根拠が示されたことはないように思う。

判明している事実とそうでないものを区別する必要がある。箇条書きにする。○は確認している、△は推定、推測を示す。

- 『繡像小説』巻1-13 第9-18期連載 ○癸卯八月初一日(1903.9.21) - △甲辰(1904)五月
- 『天津日日新聞』全20回 ○乙巳九月初一日(1905.9.29) - △光緒三十二年二月十五日(1906.3.10[9])
- 劉鉄雲乙巳(1905)日記 ○「九月二十九日一紙」「十月初三日卷十一」「十月初四日卷十五」「十月初五日卷十六」「十月十九日二紙」
- 天津孟晋書社 刊年不記(△光緒三十二年



初版

(1906) )

5 二集『天津日日新聞』全9回 ○光緒三十三年七月初十日 (1907.8.18) -十月初六日 (11.11)

説明する。

1の『繡像小説』連載は巻13(内容は原稿第14回)で中止となった。主編李伯元が原稿第11回を没書にしたからだ。第9期の刊年は表記がある。しかし第18期は刊年不記だ。推定した「甲辰(1904)五月」は複数の新聞広告にもとづく。精度はかなり高いと判断している。

2の『天津日日新聞』に第1回からあらためて再度掲載された。郭長海が「自序」を確認している(「劉鉄雲の佚詩和几件聯語」『清末小説』第33号 2010)。

連載の終了月日は不明のまま。ただし推定されている。劉徳隆は1回分の字数を基礎にして第20回の掲載日を光緒三十二年二月十五日(1906.3.10<sup>ママ</sup>[9])とした(『劉鶚年譜長編』644頁)。新聞の実物を見ることができない。この推測は参考のひとつだ。

3の劉鉄雲乙巳日記にある第11回は没書を復元したもの。その翌日から新しく第15、16回を書き始めた。九月にはすでに新聞連載が始まっている。九月二十九日を含んで十月初三日に原稿復元をやりおえた。時間的な流れからして不自然ではない。

4の単行本刊行年は推測だ。1905年頃に『天津日日新聞』連載があった。それを根拠にして単行本は1906年ではないかというのが従来からの説明だ。状況証拠だけだから説得力に欠ける。本稿はこの部分に新しい資料を提出する。

5の二集は同じく『天津日日新聞』に連載された。こちらの刊年は確定している。

以上の材料をもとに初版単行本の刊行年月を考える。

前出劉徳隆の推測「光緒三十二年二月十五日

(1906.3.10<sup>ママ</sup>[9])」を参照する。

すると初集単行本の刊行は年月を絞ることができる。

初集の『天津日日新聞』連載中に単行本化はされないだろう。連載終了後になる。大まかにいって初集連載完結の推測光緒三十二年二月から二集連載開始の確定光緒三十三年七月までだ。新暦でいえば1906年3月以降から1907年8月以前になるだろう。

この推定はあくまでも推定にすぎない。物的証拠があって可能性としていうことができるのは光緒三十三年七月(1907.8)以前には単行本が出版されていたということのみ。

ただしこの説明には弱点がある。二集連載開始前に刊行されたという証拠はあるのか。ない。二集を新聞に連載しながら初集単行本が出てくることはありうる。そうなれば1907年末まで可能性が広がる。確定できない。

もう少し予測の幅を狭められないか。単行本初版そのものに記述がない。第1次資料がないのであれば第2次資料をさがすことになる。刊行を示唆するほかの文献がないか。それを提示することが本稿の目的だ。

本稿では発行所の孟晋書社に注目する。

該書社は『老殘遊記』の発行所として知られている。だがそれ以外に名前を見たことがない。

天津には当時『天津日日新聞』『大公報』『中国報』『中外実報』『津報』『民興報』などの刊行物がある。キリスト教関係の出版社も営業していた。孟晋書社はそれら出版組織のなかのひとつだ。ただし該社の主要な出版物は文芸関係では『老殘遊記』初集のみらしい。清末にそれ以外の書物を刊行した例をみつけることができない。別の分野の刊行物があるかどうかは不明だ。

その孟晋書社が自らの活動を停止する新聞広告を出している。結論を先にいえば別の組織に買収された。吸収合併である。すなわち孟晋書社の廃業広告とっていいだろう。

**孟晋書局協記告白**  
 本局頂盤天津孟晋書社以光緒三十二年三月初十日為始重新開張添協記字樣嗣後進出等項概以協記印章為憑所有前社進出各款項及寄售等款由前社創辦自理取概與協記無涉特此布告  
 光緒三十二年三月初十日  
 孟晋書局協記謹啟

大清光緒三十二年三月十九日 第一千三百五十二號

西曆一千九百零六年四月十二號

天津『大公報』

本報每份一仙  
 本報每月一元二角  
 本報每季三元六角  
 本報每半年七元二角  
 本報每年十四元四角  
 本報外埠寄費在內  
 本報廣告費另議  
 本報代印各種中西文字  
 本報代印各種中西簿籍  
 本報代印各種中西名片  
 本報代印各種中西信箋  
 本報代印各種中西帳簿  
 本報代印各種中西合同  
 本報代印各種中西章程  
 本報代印各種中西書冊  
 本報代印各種中西圖表  
 本報代印各種中西表格  
 本報代印各種中西單據  
 本報代印各種中西憑證  
 本報代印各種中西執照  
 本報代印各種中西證書  
 本報代印各種中西契據  
 本報代印各種中西契約  
 本報代印各種中西遺囑  
 本報代印各種中西遺囑  
 本報代印各種中西遺囑

**孟晋書社告白**  
 茲因本社於光緒三十二年三月初九日截止憑中盤興協記新東執業所有以前進出款項以及各戶寄售書款項等情均由前社創辦自理取概與協記無涉特此布告  
 光緒三十二年三月初九日  
 孟晋書社謹啟

「孟晋書社告白」/天津『大公報』光緒三十二(1906)年三月十九日

買収された孟晋書社と買収した孟晋書局協記の2社が並んで広告を出した。天津『大公報』光緒三十二年三月十九日(1906.4.12)から六日連続である。掲載場所は移動しても内容は同一だ。

「孟晋書社告白」茲因本社於光緒三十二年三月初九日截止憑中盤興協記新東執業所有以前進出款項以及各戶寄售書款項等情均由前社創辦自理取概與協記無涉特此布告

本書社は光緒三十二年三月初九日限りで盤興協記を仲介人とし新理事に業務執行を任せました。すべての収支費用および各店の委託販売書の費用などは元の創設者が処理をします。協記の引継ぎ人とは関係がありません。ここに宣言します。孟晋書社告白

「孟晋書局協記告白」本局頂盤天津孟晋書社以光緒三十二年三月初十日為始重新開張添協記字樣嗣後進出等項概以協記印章為

憑所有前社進出各款項及寄售等款由前社創辦自理取概與協記無涉特此布告

本書局は天津孟晋書社を譲り受けました。光緒三十二年三月初十日より新しく開業し「協記」を付け加えます。以後、収支などの費用は協記の印鑑を証拠といたします。元書社の収支費用および委託販売などの費用はすべて元の創設者が処理します。協記とは関係がありません。ここに宣言します。

買収した孟晋書局は「協記」を付け加えただけだと説明する。しかし見出しは「書社」ではなく「書局」だ。これは社名変更だろう。それを含めての新しい開業である。

両者が強調するのは孟晋書社廃業に伴う残務整理、それも主として金銭関係の清算が主となっている。中国の当時の出版社は書店を兼ねており店頭販売も行なう。また自社刊行物だけでなく他社の出版物も委託販売をするのが普通の形態だ。それらの代金清算について責任の所在を明確にした広告だとわかる。

以上の広告から『老残遊記』初版刊行の下限が判明する。すなわち孟晋書社が営業停止した光緒三十二年三月初九日(1906.4.2)以前の出版になる。存在しない孟晋書社が『老残遊記』を刊行することはできないからだ。

これに前述の『天津日日新聞』連載終了の推定光緒三十二年二月十五日(1906.3.10<sup>9</sup>)以後を組み合わせる。

本稿の結論は次のとおり。

『老残遊記』初集の刊行は光緒三十二(1906)年二月半ばから三月初めの期間である。旧暦の二月半ば、三月初めと幅をもたせるのは日にちが特定できなければ正確な新暦に換算できないからだ。

通説の1906年刊行をあらためて確認した。違うのは資料に基づいて同年二月末から三月初までの間に絞り込んだところだ。 罫



## 《广肇周报》(1919~1920) 小说目录

### 王 玉

《广肇周报》(The Kwang Shao Weekly) 藏于上海图书馆, 现存28期, 最早一期是第8期, 1919年5月25日出版; 最后一期是第86期, 1920年11月28日出版。该报是上海广肇公所的刊物, 主要栏目有论说、粤闻、岭南消息、文苑、谭丛、小说等<sup>\*1</sup>。据笔者统计, 现存《广肇周报》共刊14篇(部)小说, 其中, 短篇12篇(部), 长篇2部, 翻译1篇。这些小说大多数转自他刊, 原创较少。《广肇周报》所登小说都未标明是否转载, 本文提出的具体篇目的转载情况, 均依据该篇小说的最早版本予以断定。《广肇周报》为何大肆转载小说? 笔者认为有两种可能, 一是周报用稿量大, 而来稿偏少; 二是利用小说刷版, 增强刊物可读性。当时正处于五四运动前后, 新旧文化交锋激烈, 但《广肇周报》所登小说作者, 多是属于鸳鸯蝴蝶派的旧派文人。这跟转载关系较大, 因为《广肇周报》转发的小说, 多是1911~1915年间创作的。就笔者所见, 当前尚未有小说目录著作对《广肇周报》所刊小说进行著录, 因此将其整理如下, 以供学术界参考。

#### 一、第8期(1919年5月25日)

1. 《爱国少年》, 作者: 濠溪沪客。
2. 《烧饼子》, 作者: 景曾。
3. 《红衣女》, 作者: 昂孙。

注: 刊于“小说”栏目, 其中, 《爱国少年》



图1: 《广肇周报》报名

标“时事短篇”。《烧饼子》和《红衣女》最早见于《民权素》月刊1915年第4期, 这里应是转载。《民权素》1914年4月创刊于上海, 刘铁冷、蒋箸超编辑。

#### 二、第9期(1919年6月1日)

4. 《酒徒郑一》, 作者: 天醉。

注: 刊于“小说”栏目, 标“警世小说”, 转载自《民权素》1915年第9期。

#### 三、第10期(1919年6月8日)

5. 《真正之爱情》, 作者: 冥飞。

注: 刊于“小说”栏目, 转载自《民权素》1915年第11期。

#### 四、第12期(1919年6月22日)

6. 《苗女(续)》, 作者: 黄花奴。
7. 《舵工》, 译者: 悲秋。

注: 刊于“小说”栏目, 《苗女》前标“哀情短篇”, 从“续”可以看出从第11期开始连载。黄花奴即黄中, 上海宝山县白沙镇人, 鸳鸯蝴蝶派作家, 热衷写黑幕小说, 《上海秘幕》编辑主任, 作品有小说《江山青峰记》等。《舵工》前标“寓言短篇”, 是篇翻译小说, 底本不详, 与《小说丛报》1914年第2期刊载的《舵工》(水心译、古月述)内容相似, 但不是转载。《小说丛报》1914年5月在上海创刊, 1919年5月停刊, 徐枕亚任编辑主任。

#### 五、第15期(1919年7月13日)

8. 《芸娘》, 作者: 李蝶庄。

9.《娟娟》，作者：天马。

注：刊于“小说”栏目，《芸娘》标题前标“哀情短篇”，作者李蝶庄，武侠小说家，著有《雍正剑侠传》、《绿林剑侠传》、《燕子飞》等。其中，《雍正剑侠传》为短篇小说集。《娟娟》转载自《生活日报》1914年2月16日12版。《生活日报》(1913-1914)，由夏丐尊创办于上海，叶楚伦任笔政。

六、第17期(1919年7月27日)

10.《蕊玉》，作者：德润。

注：刊于“小说”栏目，题前标“惨情小说”，转载自《生活日报》1914年5月12日-13日第12版。

七、第22-23期(1919年9月1日)

11.《亚勒白轶事》，作者：南邨。

注：刊于“小说”栏目，作者“南邨”即杨南邨，转载自杨南邨《世界亡国稗史》，上海交通图书馆1917年版，第13页-18页。

刊，李怀霜是主笔。李怀霜(1874-1950)，广东信宜人，举人出身，同盟会会员、南社社员，与小说家吴趼人往来密切。

九、第69-77期(1919年8月1日~9月26日)

13.《欧史遗闻·罗马克野司徒》，译者：林纾、陈家麟\*3。

注：刊于“小说”栏目，转载自上海《亚细亚报》1915年9月10日-10月3日。

十、第40-49期(1920年1月4日~3月14日)

14.《京华追忆录》，作者：林琴南。

注：刊于“谭丛”，是一部笔记小说集，林纾佚著，现存19则，分别为：(二)：塞楞额、高宗优于傅恒、张廷玉、清高宗不改服饰、传钞伪稿(40期)；(七)：野史之禁、陈安兆、顾汝修、添髻记序、日下旧闻(43期)；(八)：天一阁制、王伦、屈翁山、勤有堂宋槩、四百里驰驿取禁书(44期)；(十三)：绵亿太监、尹嘉铨为父请谥、尹嘉铨罪状、乾隆乙巳千叟宴(49期)\*4。

补录：第1期或第2期(1919年4月6日或4月13日)

15.《哀鸿泪》，作者：忧国少年。

注：《民国日报》1919年4月17日刊，题前标“时事小说”，声称“录自《广肇周报》”\*5。

《民国日报》1916年1月22日在上海创刊，总编辑为叶楚伦。《广肇周报》每周一期，逢星期日发行。现存最早一期是第8期，1919年5月25日出版。由此可以推知，创刊号当在1919年4月6日。因此，《哀鸿泪》只能刊发在1919年4月17日之前出版的《广肇周报》第1期或第2期上。

八、第25-71期(1919年9月21日~1920年8月15日)

12.《炙蛾灯》，作者：怀霜。

注：刊于“小说”栏目，这是一部长篇小说，作者“怀霜”即李怀霜，标题前标有“外交秘史”，转载自《天铎报》1911年5月1日-7月7日，或十八回铅印本\*2。《天铎报》1910年3月11日创

备注：1917年8月，(上海)交通图书馆出版“社会小说”《情天绮语》(情禅室主编纂、曼殊批眉、江头人评点)，收德润《蕊玉》、天马《娟娟》、黄花奴《苗女》、李蝶庄《芸娘》等52篇。换言之，《广肇周报》中的这4篇(德润《蕊玉》、天马《娟娟》、黄花奴《苗女》、李蝶庄

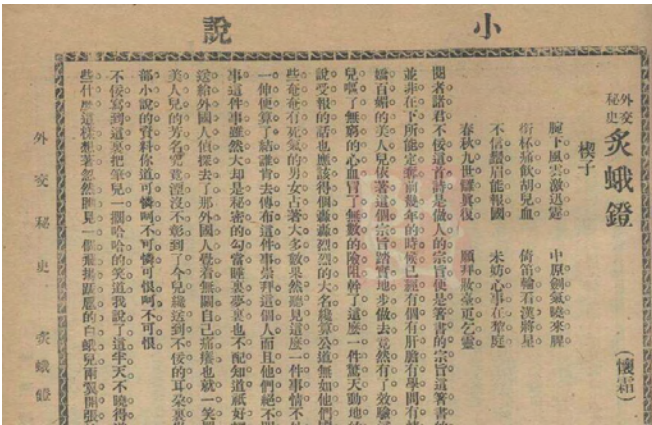


图2：《炙蛾灯》书影

《芸娘》), 也有可能转自该书。



图3:《情天綺語》封面

(作者系《上海行政学院学报》编辑)

【注释】

- 1) 详见王玉:《〈广肇周报〉与林纾佚著〈京华追忆录〉》,《晚清小説から》2019年第133号。
- 2) 仅见于阿英《晚清小説目》,未见原书。
- 3) 王玉《对陈家麟生平及其译作的补遗与考证》(《清末小説から》2018年第131号)首次著录。
- 4) 详见王玉:《〈广肇周报〉与林纾佚著〈京华追忆录〉》,《晚清小説から》2019年第133号。
- 5) 樽本照雄:《清末民初小説目録》(第10版),清末小説研究会,第180页。

### 林译小説口译者李世中生平考

王 玉

林纾和李世中合译的小説只有两种,一是法国沛那著《爱国二童子传》(商务印书馆1907年初版),二是法国大仲马著《玉楼花劫》(商务印书馆1908年初版,1910年又出版了《玉楼花劫续篇》)。关于林纾的合作者李世中,学界对其生平多语焉不详,如林纾弟子朱羲曹仅称,“李世中,福建闽侯人,精西文,尝与先生译欧西小説《玉楼花劫》等书。”\*1笔者多方搜集资料,大致勾勒出了李世中的人生经历。



图1:《爱国二童子传》书影



图2:《玉楼花劫》书影

李世中，1881年（清光绪七年）生，字子峰，福建侯官县人<sup>\*2</sup>。他和严复（福建侯官县人）是同乡，早年发展路径也很相似，都是就读福州船政学堂。不过，严复是福州马尾船政后学堂驾驶班第一届毕业生，李世中是福州马尾船政前学堂制造班第六届毕业生<sup>\*3</sup>。光绪三十一年（1905年）冬，24岁的李世中从福州船政学堂毕业。

李世中毕业后是否直接出国留学，目前尚不得而知。据《陆征祥为李世中回国葬亲恳请接见致徐世昌函》，李世中曾在“巴黎比京法政大学两次毕业，学有根底”<sup>\*4</sup>。比京，应指比利时首都布鲁塞尔。但其留学时间、学校、专业等均不详。

《中华民国外交史辞典》称，李世中1908年开始任驻法国使馆三等翻译官。这是李世中第一个外交职务。在清政府外交官员中，翻译官分头等、二等、三等三个等级，三等翻译官月薪200两白银<sup>\*5</sup>。李世中能充任驻法国使馆三等翻译官，说明他精通法文。在此前后（1907年-1910年），李世中与大同乡林纾（福建闽县人）合译的两部小说在上海陆续出版。李世中和林纾能够成功合作，意味着他有段时间待在国内。

林纾对口译者李世中比较满意，称之为“吾友”。他在《爱国二童子传》序中说，“畏庐闽海一老学究也，少贱不齿于人，今已老无他长，但随吾友魏生易、曾生巩、陈生杜衡、李世中之后，听其朗诵西文、译为华语，畏庐则走笔书之”<sup>\*6</sup>。林纾和李世中合译的两部作品都是法国小说。值得一提的是，林纾的法文口译者多来自福州船政学堂，除了李世中，还有王寿昌、林殆等。这是因为该学堂分为前后学堂，其中前学堂专习造船，聘法国人为教习，学法文法语，故又名法文学堂或法国学堂<sup>\*7</sup>。

民国成立后，林纾和李世中的合作戛然而止。这应该是李世中工作愈来愈忙，且又常年驻外，要回国与林纾合作翻译小说不太现实。《中华民国外交史辞典》称，1912年后李世中在驻比利时、俄国、巴西、葡萄牙等公使馆任职，其间还曾回国在外交部短暂任职。

其中，时间比较可考的有：1915年前后，任驻比使馆三等秘书官<sup>\*8</sup>。1918年前后，任驻俄使馆（二等）秘书<sup>\*9</sup>。1919年7月，调署驻义使馆二等秘书<sup>\*10</sup>。在担任驻义使馆秘书时，兼任万国农会常驻员<sup>\*11</sup>。1929年前后，任巴拿马代办<sup>\*12</sup>。1930年，兼尼加拉瓜总领事<sup>\*13</sup>。同年，任签订华人赴尼待遇协定全权代表<sup>\*14</sup>，并参加在尼加拉瓜举办的国联赋税委员会会议<sup>\*15</sup>。1931年，尼加拉瓜首都地震，全城覆灭，李世中致电南京外交部，请求筹款救济遭难华侨。李世中在电文中称，“各商号尽烧毁，华侨百余人露宿，伤饥交迫，情形凄惨”<sup>\*16</sup>。1931年，兼驻巴拿马总领事<sup>\*17</sup>。1934年2月，李世中辞去议定中瓜友好通商航海条约全权代表一职<sup>\*18</sup>。

1935年1月，时年54岁的李世中奉命回国，“偕男女公子等，同乘大来公司轮船搭虎脱总统号，于前晨（5日）十时许抵沪，将于一二日内入（南）京，向外（交）部报告”<sup>\*19</sup>。《新闻报》在这篇报道中称其为博士，这意味着李世中可能拥有博士学位。同年，李世中代表驻掘地孖（今译危地马拉）直属支部，出席国民党第五次全国代表大会<sup>\*20</sup>。自此以后，在公开报刊中，再也没见



不到李世中的信息。

罍

(作者系《上海行政学院学报》编辑)

【注释】

- 1) 朱義胄：《林氏弟子表》，世界书局，1949年，第7页。
- 2) 石源华：《中华民国外交史辞典》，上海古籍出版社，1996年，第820页。
- 3) 高时良等：《中国近代教育史资料汇编：洋务运动时期教育》，上海教育出版社，2007年，第381页。
- 4) 《北洋军阀史料：徐世昌》（七），天津古籍出版社，1996年，第544-545页。
- 5) 房列曙：《中国近现代文官制度》（上），商务印书馆，2016年，第74页。
- 6) 林纾、李世中：《爱国二童子传》（卷上），商务印书馆，1914年，达旨第4页。
- 7) 郑天挺等：《中国历史大辞典·清史卷》（下），上海辞书出版社，1992年，第742页。
- 8) 《北洋军阀史料：徐世昌》（七），天津古籍出版社，1996年，第544-545页。
- 9) 宁艳红：《旅俄华侨史料汇编》，黑龙江教育出版社，2016年，第139页。
- 10) 《外交部令第九十三号》，《政府公报》1919年第1247期。
- 11) 《义使馆电陈救济灾区办法》，《新华日报》（北京）1921年4月13日，第3版。
- 12) 《朱绍阳昨午赴京》，《新天津》1929年9月29日，第3版。
- 13) 《训令驻巴拿马代办兼驻尼加拉瓜总领事李世中》，《外交部公报》1930年3卷5期。
- 14) 《国民政府令》，《行政院公报》1930年第211号。
- 15) 《国联赋税委会派李世中参加》，《中华实事周刊》，1930年8月2日，第10版。
- 16) 《附巴拿马代办李世中来电二件》，《外交部公报》1931年4卷1期。
- 17) 《侨务委员会指令第七八七号》，《侨务委员会公报》1934年第12期。
- 18) 《国府昨日之命令》，《新天津》1934年2月28日，第3版。
- 19) 《驻巴拿马代办李世中博士到沪》，《新闻报》1935年1月7日，第10版。

- 20) 《指派李世中为该部出席五全大会代表》，《中央党务月刊》1935年第87期。

清末小説から

- 梁 艶○徘徊于新旧之間：論晚清職業小説家的小説理論——以李伯元和吳趸人為例『杭州師範學院學報（社會科學版）』2003年第1期 2003.1
- 虞坤林編○『王国維在一九一六』太原・山西出版集團、山西古籍出版社2008.1
- 鄭錦懷、岳峰○莎劇故事的最早中訳再考 劉文彬、李亜舒『英漢比訳研究二十年』青島・中國海洋大學出版社2011.4
- 王 景山○“阿世”和“禽男”『魯迅書信考積（增訂本）』北京・文化藝術出版社2013.3
- ○關於《新青年》問題的若干封信『魯迅書信考積（增訂本）』北京・文化藝術出版社 2013.3
- 顏 健富○雜混、獵奇与翻轉——論何迴《獅子血》「支那哥倫波」的形塑『清華中文學報』第10期 2013.12 電字版
- 郎 需穎○十九世紀初西方史學之東漸——從館藏《瀛環志略》談起『黑龍江史志』2014年第5期 電字版
- (美) 金多士 GILBERT McINTOSH 著、王海訳、王曉寧校○『在華傳教士出版簡史 THE MISSION PRESS IN CHINA』北京・中央編訳出版社2017.12 報史報人訳介叢書
- 陳 大康○晚清報刊上的林紆軼聞『世紀(CENTURY)』2018年第2期 2018.3.10 未見
- 徐 沛○『圖像与啓蒙——清末民國畫法教化效能研究』北京・中國社會科學出版社2018.6 四川大學文學与新聞學院研究生導師叢書
- 王 桂妹○“寬容”与“不容”：魯迅、周作人对林紆的批判——“五四新文化運動反对派”的歷史面相考辨『西南大學學報（社會科學版）』第44卷第4期 2018.6.28
- 夏 曉虹○林紆的海軍情結——從《不如婦》說起『中山大學學報（社會科學版）』第58卷第5期 2018.9.15
- 姚 達兌○『現代的先声：晚清漢語基督教文學』広

州・中山大学出版社2018.11

楊 国明○『中国近現代涉閩小説研究(1804-1949)』上海人民出版社2018.11

羅振玉、王国維○『雪堂雅集——羅振玉、王国維の學術世界』華東師範大学古籍研究所、西泠印社拍賣有限公司2018.11

魯道夫・瓦格納 RUDOLF G. WAGNER、賴芊擘、徐百柯、魏泉、毛立坤、崔潔瑩訳○『晚清的媒体圖像与文化出版事業』台湾・伝記文学出版社股份有限公司2019.1

魯 毅○『從国家叙事到娛樂話語——鴛鴦蝴蝶派流變研究(1909-1920)』北京・商務印書館2019.2

張 静○『1899-1908翻譯文学之“變相”研究』北京・光明日報出版社2019.3 光明社科文庫

管 賢強○『民国初期中学国文教科書外国翻譯作品研究』北京・社会科学文献出版社、北京社科智庫電子音像出版社2019.3

王 玉○林訳小説口訳者林驕考『閩江学院学報』第40卷第3期 2019.5 電字版

白 草○【書評】隔膜の日本漢学家『文学報』第167期 2019.6.27

裴效維主編『吳趸人全集：吳趸人研究資料彙編』

哈爾濱・北方文藝出版社2019.3

●第1輯

吳趸人年譜……王俊年

吳趸人伝略稿……(日本)中島利郎著、王維訳

吳趸人生平及其著作……李育中

吳趸人到上海年份考……葉 易

吳趸人与《漢口日報》——对新發現的一組吳趸人材料的探討……王立興

附：吳趸人在《漢口日報》時期材料四種……王立興

李、吳兩墓得失記(節録)……魏紹昌

●第2輯

五十年來中国之文学(節録)……胡 適

吳趸人……阿 英

吳沃堯論……任訪秋

中西合璧的拼盤——吳趸人政治思想初探……胡冠瑩

苦難的心靈歷程——吳趸人与晚清社会……張 強

吳趸人的小説論……黃 霖

晚清小説中的情節結構類型……(捷克)M. D. 維林吉諾娃(Milen Dolezelova-Velingevova)著、(台湾)謝碧霞訳

説《二十年目睹之怪現狀》札記……吳小如

從《九命奇冤》的表現特色看它在文学史上的地位……王俊年

論《恨海》中的人物塑造……(加拿大)邁克爾・伊根(Michael Egan)著 趙鑫虎訳

《上海遊驂録》——吳趸人之政治思想……阿 英

《吳趸人伝》和《趸人十三種》……吳小如

試論吳趸人的短篇小説……陳子平

關於我仏山人的筆記小説五種……盧叔度

《俏皮話》前言……盧叔度

一篇新發現的吳趸人佚作……顏廷亮

吳趸人的兩篇佚文……魏紹昌

新見吳趸人《政治維新要言》及其它……張 純

關於《海上名妓四大金剛奇書》的兩組資料……魏紹昌

●第3輯

吳趸人著作系年 附録一：吳趸人未刊、初刊不詳、真偽未定著作録/附録二：吳趸人著作辨偽……裴效維

吳趸人研究資料索引 單篇文章/文学史/辞書……裴效維

附録：中国台湾、香港地区及日本研究吳趸人資料索引 中国台湾/中国香港/日本……裴效維

《二十年目睹之怪現狀》索隱……(中国香港)高伯雨

『中国現代文学研究叢刊』2019年第5期(総第238期) 2019.5.15

知識遷移与本土再造——近代中国“教育小説”的發生与辨義……馬勤勤

吳福輝《中国現代文学發展史(插图本)》英訳本序……(美)王德威著、季劍青訳

『中国現代文学研究叢刊』2019年第6期(総第239期) 2019.6.15

林訳《撒克遜劫後英雄略》的“民族主義”索隱……王 侃

漢訳文学研究：跨文化場域的重構——李今主編《漢訳文学序跋集(1894-1949)》前四卷……李浴洋